

あけのほし 2014 年 11 月

「後世への最大遺物」

菊田行佳

「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」

(1 コリント書 13 章 12-13 節)

今から 100 年前の日本の人々は、後世の私たちに何を残そうとしてくれたのでしょうか。そしてその問いは、同時に今の私たちにも向けられます。私たちは 100 年後の人々に、いったい何を一番大切なものとして残そうとしているのでしょうか。

私は 3 年前に新居浜に引っ越してくる前は、横浜の大きな街に住んでいました。東日本大震災があったとき、福島第一原発の事故が最大の関心事でした。風に流されてやってくる放射能が、自分というよりも小さいわが子に降り注ぐ恐怖に、心を奪われます。その恐れは、その後得られる科学的知識によって単なる懸念ではなく、的を得ていたのだと分かります。子どもは、地面に近く呼吸をするため、大地に降り積もる放射能を大人より多く吸引しますし、感受性の豊かな子どもの方が、心因的にも大きく影響を受けるとのことです。子どもの通う幼稚園の運動場を、なぜ除染しないんだと怒っていたあるお父さんの顔を思い出します。福島在住の女子学生が、「私は子どもを産めるのでしょうか」と発した言葉は、私たちの胸を突き刺すのではないのでしょうか。

確かに私たちは文明の発展によって大きな恩恵を受けてきたことは間違いはありません。技術革新によってそれまで不治の病として死んでいった命が救われる喜びを、否定することは出来ません。しかし、同時に技術がいくら進歩しても、それだけで人を幸せにすることは出来ないということも、今回私たち日本人は、大きな災害を通して学ばなくてはならないのだと思います。最先端の科学技術を何のために用いるのかが問われますし、そもそも技術的にできる事でも、人が制御できないものを動かしてはならないのだと、自ら「止める」という判断こそ、人間の叡智の結晶なのではないのでしょうか。自らの限界を認める勇気。人は万能なのではなくて、欠陥を抱えて生きる存在なのだと思える謙虚さこそ、深い知恵の行き着くところなのだと思います。

今から 100 年前、明治時代の後半に、内村鑑三という人物が『後世への最大遺物』という本を記しました。明治の日本は、豊かなアメリカやヨーロッパの国々の人々の生活にあこがれて、豊かになることこそ、人の幸せに繋がるのだという空気に支配されているのだと、内村は指摘しています。「我々には金がない、事業がない、良い本がない」と人々は言うが、日本人が本当に必要なものはそれらではない。日本の教育でも、学問でも、そし

て読む本の中身でも、最も足りないのは、L i f e－命の欠乏なのだと思います。そして、100年後に生まれてきた人が、この本を読んだとき、自分たちが一番大切に後世に残そうと信じるものは、金や何か建物の豊かさなのではなく、命の豊かさであったのだと、伝えたいと言います。貧乏人の自分たちが、身を削って捧げたお金を、寄せ集めて建てた建物のその経過こそ、大切なのだ。その生き様、生きた生涯こそ、後世の人々を勇気づけ、自分たちも生きて行けるのだという希望が持てるのだと内村は言います。

内村は、人の生涯はたとえどんなものであっても、すべてが尊い生涯だと言います。すべての生涯が、後世の人々に残すに足りるのだということです。そしてその上で、たとえ少数であっても正義に立つ生涯を、私たちは選ぼうと呼びかけます。この場合の正義とは、弱い立場に立たされる人の側に立つ正義と説明されていますので、実質上はL o v e一愛であると言うことが出来るでしょう。聖書から学びそして聖書を生きた内村は、おそらく冒頭に挙げた聖書箇所などを念頭に置いて、この書物を書いたのだと思われます。隣人を愛するということは、困っている人、苦しんでいる人の身を、自分の身と重ねて共感することだとするのならば、100年後の私たちの世界に内村がいたとしたら、きっと福島の放射能に怯えて暮らす人々の立場に立とうとするでしょう。そして今の私たちにも、結果はともかく、愛に生き、正義に生きる生涯を、後世の子どもたちに見せようじやないかと呼びかけるのではないかと思います。

残念ながら、原子エネルギーは人間の能力を遙かに超えるものであると結論づけなくてはならないと、私は考えます。そしてそれ以前に、今の日本人は人間としての成熟さは、明治時代からさほど変わっていないと思われますので（もしかしたらより退化しているかもしれません）、とてもそのような代物は扱うことは出来ないのではないのでしょうか。都合が悪いとすぐに隠し事をしますし、誰も事態の責任をとろうとしません。そして何よりも、L i f eを最も優先するという倫理が欠けていますので、命よりも効率や利益、そして体裁を建てることを優先してしまうのは目に見えています。少なくともこの辺が改善されない限り、地震の巣の上に、不安定な地盤の上に乗っている日本では、原発を動かして行くのは無理があるでしょう。100年後の人々に、「私たちの後世への最大の遺物は、科学技術です」とは、私は言いたくはありません。なぜなら、100年後に技術で勝てるわけではないのですから。やはり、明治の内村に負けることなく、豊かな命を大切にした生き様、生きた生涯を残したいと願います。

I

L i f eは、単に息をしているという命には限りません。すべての人を大切な一人前の人間として、人格を受け入れて生きることをも表しています。この一つ一つのL i f eを大切にすることこそ、L o v eであります。時代が変わっても、土地が変わっても、最も偉大なものはこのL o v eなのです。L o v eに生きる人生こそ、私たちは、後世の人々に、そして子どもたちに、バトンタッチをして行きたいと願います。